



Title	努力とは何か? : 努力動機という観点から
Author(s)	上野, 淳子
Citation	大阪大学教育学年報. 2001, 6, p. 161-172
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7894
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

努力とは何か？～努力動機という観点から

上野 淳子

【要旨】

Weinerの達成動機づけ理論では、努力帰属は次回への成功を期待させ達成行動を促進する、と考えられているが、実証研究では理論に合致しない結果も得られている。その原因の1つとして、努力には理論で定められている以上の様々に豊かな意味がある可能性が考えられる。実際、社会学的あるいは教育学的立場からは、われわれ日本人が独自の努力観を持っていることが多く指摘されている。しかしながら、それを心理学的に実証する研究は行われていない。

そこで、「何故努力するのか」という努力動機を探るため、大学生を対象として質問紙による探索的調査を行った。研究Ⅰでは、自由記述で努力動機を収集し、続く研究Ⅱでは、その努力動機を類型化し、どのような機能を持つのかについて検討した。その結果、努力には様々な形態のものがあり、これまでの達成動機研究では扱われていなかった、理由がない、外発的、自己目的的、といったものも存在することが明らかとなった。また、この形態の努力を行う者には、努力しても結果を統制することができないと思う傾向があることも示された。

今後は、これらの努力動機を含む努力観が、帰属様式に与える影響を検討する必要があろう。

1. 問題

(1) Weinerの達成動機づけ理論における問題点

Weinerの達成動機づけ理論(Weiner, Frieze, Kukla, Reed, Rest & Rosenbaum, 1971; Weiner, 1979)は、特にその帰属理論的アプローチを中心として、達成動機研究のみならず、多様な研究領域に影響を与え、また応用されている。しかし、Weiner理論に基づいたそれらの研究を概観してみると、多くの問題が見受けられる(平川(上野)・尾崎,2000)。ここでは、の中でも、努力帰属の意味が理論と合致しない点に注目したい。

Weiner理論では、まず、先行経験の成功・失敗が能力や努力などに帰属される。それらの帰属因は原因次元上に布置されており、次元上の位置付けが感情や期待度を介して次回の達成行動を決定するとされる。そして原因次元では、努力は「内的」で「不安定」(Weiner et al.,1971)なものとして位置付けられており¹⁾、その性質上、成功失敗いずれにおいても、努力帰属がなされれば無力感は抑えられ、次の結果に対する期待が高まり、達成行動が促進されると考えられている。

日本における実証研究では、以下のような結果が得られている。失敗の原因を直前の努力のような不安定要因に帰属した場合には、期待の維持や高揚につながり(相川・三島・松本,1985)、試験の失敗を普段の努力不足に帰属したときには、くやしさや後悔の気持ちが喚起され、勉強するようになり次の試験成績があがる(奈須,1990;奈須・堀野,1991)。また、速水・長谷川(1979)と速水(1981)は、オーバー・アチーバーのほうが努力に帰属しやすいことを示している。便宜的実験課題においても、努力不足に伴ううしろめたさとしての感情は達成行動を抑制しないことが明らかにされている(広瀬・石井・木村・北田,1982)。以上はWeinerモデルを支持し、欧米の研究結果とも一致するものである。

しかしながら一方で、成功の原因を努力に帰属したときはやる気が喚起されて次の学業成績をあげることにつながるが、失敗の原因を努力不足に帰属しても統制感につながらない(樋口・鎌原・大塚, 1983;伊藤, 1996)、また失敗の努力帰属は自信につながらない(穂坂,1989)ということも示されている。それどころか、失敗の努力帰属は絶望感と結びつくという結果も報告されている(桜井,1989a)。これはWeiner理論の仮定する努力帰属の機能と明らかに矛盾する。

なぜ、失敗の努力帰属に関して理論に反する結果が見られるのだろうか。桜井(1989a)は、失敗の努力帰属が統制感や期待につながらない理由を以下のように考察している。

この点を説明するためには、わが国におけるいわゆる“努力万能主義”的教育態度に言及しなければならないだろう。すなわち、わが国では教師も親も、子どもの学業成績が劣ると、その原因も十分考えず、異口同音に“おまえは努力が足りないので。もっと努力しなさい”と激励の言葉を与えることが多い。…このような現象が、子どもたちに失敗の原因を短絡的に“努力”不足に帰属するよう仕向けているのでなかろうか。

他にも桜井(1989a)は、方法論として、調査の際に社会的望ましさへの反応が生じ、教師のうけがいい“努力”不足が失敗の原因として挙げられたのではないかとか、あるいは失敗の原因を能力に帰属したらひどい抑鬱や絶望感に陥ってしまうので、それを避けるために自己防衛的に努力に帰属したのではないか、と考察している。

その他の原因として、努力という言葉は多義的で、個人個人で努力に込める意味が異なる可能性も考えられる。Weiner理論では、努力は内的・不安定という原因次元上の特徴でしか考えられていないが、個々人がその枠組みにあてはまる努力概念を持っているとは限らない。ある人にとっては自発的にするものではなく強制されてやるものなのかもしれないし、やろうと思ってもできないものなのかもしれない。また、努力してもどうせ無駄だと思っているのかもしれない。帰属と原因次元の対応関係は疑われており、Weiner自身、努力を人格変数として考えると安定的要因として捉えられてしまうエラーを指摘している(Weiner,1983)。この問題を解消するため、能力や努力といった帰属因に帰属させるのではなく、内的・外的等の原因次元に直接帰属させる方法も開発された(Russell, 1982; Ronis, Hansen & O'Leary, 1983)。しかしながら原因次元自体が適切かどうかについても様々な議論があり、必ずしも絶対的・固定的なものと捉えるべきでないという指摘(Weiner,1979)を考慮すると、原因次元に囚われるのではなく、より自由なボトムアップ的アプローチを行うことにも意味があるだろう。よって、理論の枠組みから離れ、個人が努力をどのような意味を持つものとして捉えているか、どのような努力の経験を持っているか、ということを加味した研究を行う必要があろう。

他にも、「努力」や「頑張り」といった日本語の意味はかなり曖昧であり、国家的大事から日常の些細な出来事まであらゆることについて使われる語であるので、個々人・場面に応じて違った意味をもつもののが、全て「努力不足」の一言に集約されている可能性もあるのだが、この努力観についての問題は次で詳しく述べる。

(2)努力観をめぐる議論

日本人論といったものでは、努力(あるいは頑張り)の重要性は必ずといっていいほど指摘してきた。そもそも努力と同義の「頑張る」という言葉自体、日本独特のもので、欧米にはもちろん、文化的に近い朝鮮語や中国語にも該当する語は見られないという(天沼,1987)。土居(1971)によると、日本人の努力の特徴は強迫的で目標がない、つまり「努力のための努力」であり、そしてそれは「そうしないと気がすまない」という日本人独特の心性によるものである。また、天沼(1987)や中谷(1991)によると、日本人が勤勉努力主義民族なのは、数千年にもわたる思想や生活態度(国民性)の表れであり、そもそもは、一生懸命努力すれば狭い土地からも大量の米を収穫できるという日本の風土気候が農民の努力を促し、やがてそれが努力を絶対の善とする思想として、日本の隅々にまで浸透していったのだという。

現在の学校教育においても、努力重視の傾向は著しい。欧米では、能力別に教育することこそ平等な教育とされているが、日本では逆に能力別教育は「差別」として批判される(河合,1976; 中根,1967)。それは戦後教育の発展の中で、教育が大衆化・平等化されていくのに伴い、生徒の生得的能力においては差異がなく、学力差は環境や努力の差である、という考えが支配的になってきたからである(苅谷,1995)。この努力賛美の教育の特質として、中谷(1991)は以下の点をあげている。まず、人間は努力しさえするならば、どんな目標でも実現できるはずという信念を持たせるので、子供にやる気を起こさせる。しかし人間の能力の限界を考えず、また人間を均質なものとして捉えるので、画一的教育を正当視する危険性がある。さらに、目標が子供にとって高すぎた場合でも、失敗は子供の努力不足にされるので傷ついたり、長時間の

学習こそが良いとして生産性や能率を考慮に入れないという問題を引き起こす可能性がある。Weiner理論の多くは学業場面に適用されていることを考えると、このような学業における努力の意味への指摘は注目に値する。

(3) 心理学で努力観を扱うには

上述したように、努力は我々にとって非常に大きな意味を持ったものである。これまでの論は、社会学的、また教育学的立場からなされたものであるが、最初に述べたように、心理学の帰属研究においても、努力帰属の特殊な機能が見られ、その原因としてこのような努力の賛美とそれがもたらす弊害が指摘されていることは非常に興味深い。しかしながら努力そのものに焦点をあてた研究は行われておらず、強迫的で目標のない努力、能力差を否定する役割を持つ努力、というものが実際どの程度存在するのか、またそれが帰属様式に対してどのような機能を持つのか、といったことについてはこれから調査してゆく必要がある。

また、先述の論は主に日本人に特徴的なものとしての努力を指摘していた。しかし、日本人独特のものであるのか、普遍的なものなのかについては文化間での比較検討が積み重ねられる必要がある。北山・高木・松本(1995)が指摘するように、文化によって心理的プロセスが異なることは考慮すべきである。しかし、成績の悪い者のはうが努力帰属しやすいというMarsh(1984)の結果や、Covington & Omelich(1979)が、子供にとって努力はしなければ罰せられ、だからといって下手に努力して失敗しても無能力を露呈する結果になるので、努力を“両刃の剣(double-edged sword)”と呼んでいることなどは、上の「日本人的努力論」にもあてはまるものであり、「日本人独特」と言いきれない可能性がある。よって、本稿では、文化間の比較には触れず、あくまで日本人の被調査者に見られるものとしての努力観の種類とその機能を扱ってゆくこととする。

(4) 努力動機の意義

どのような努力観が実際に存在するのか実際に調査する際、手始めに「何故努力するのか」という動機づけの点からみると、様々な努力の構造・種類を捉えることができるのではないかと考えられる。その際、学習領域に限定されており、またそれに対して生徒が「努力」しているとは限らない等の問題はあるが、「何故学ぶのか」について様々な動機が扱われている学習動機研究が参考になる。

学習動機の種類に関する研究は多い。樋口(1985)は、課題を解決すること自体が目的の「課題志向」・他者との競争に勝ち、自分の能力を示すことが目的の「能力志向」・友人からの承認を得ることが目的の「友人承認志向」・教師や親からの承認を得ることが目的の「成人承認志向」の4因子に分類した。速水(1987)は、教師や親からの承認を得、叱責を回避する「承認志向動機」・自分の将来のために現実社会への適応手段としての「現実志向動機」・好奇心や向上心による「理解志向動機」の3因子を見いだしている。また、桜井(1989b)は、学習それ自体が目標の「内的動機」・褒められたいから、叱られたくないからという「外的動機」・友達に勝ったりよい成績をとりたいという「外生的動機」の3因子を見いだした。これらはいずれも、学習動機質問紙を作成し、回答を因子分析して得られた結果であるが、自由記述からボトムアップ的に分類することを試みたのが市川(1995)である。彼は、学習内容がおもしろいからという「充実志向」・頭を鍛えるためという「訓練志向」・仕事や生活に生かすという「実用志向」・他者もやっているからという「関係志向」・プライドや競争心からという「自尊志向」・報酬を得るためという「報酬志向」の6種類を見いだしている。

鹿毛(1995)は、これら樋口(1985)・速水(1987)・桜井(1989b)・市川(1995)の学習動機の分類を、学習意欲の質という観点から、「内容必然的学習意欲」「自己必然的学習意欲」「状況必然的学習意欲」の包括的な3つの枠組みの中に位置付ける試みをしている(Table1)²⁾。

内容必然的学習意欲とは、「～を学びたくて学ぶ」という意欲である。自己必然的学習意欲は、「肯定的な自己概念の獲得のために学ぶ」ものであり、他者との優劣の比較に焦点がある「相対比較志向」と、自分自身の絶対基準による「向上志向」に区別される。また、「状況が要求するので学ぶ」という状況必然

的学習意欲も、人間関係を源泉とする「関係必然的」学習意欲と、社会的な手段一目的関係や報酬随伴性を源泉とする「条件必然的」学習意欲に分類される(鹿毛,1995)³⁾。

以上みてきた学習動機の分類法を参考に、様々な努力の理由を収集し分類することは、努力観を捉える上で有効であろう。ここでは、対象や領域は考慮せず、「何故努力するのか」という理由を「努力動機」と名付けることにする。努力動機は学習動機、学習意欲のあらゆる分類を包括しつつ、独自の動機も持つ概念であると位置づけることができよう。努力動機に関する研究を行うことによって、現象的にどのような努力観が存在するのか、また、努力観をどのように分類すればよいのかの糸口がつかめるのではないかと考えられる。

Table1:学習意欲に関する概念(鹿毛,1995を一部省略)

内容必然の学習意欲	自己必然の学習意欲	状況必然の学習意欲
向上志向	相対比較志向	条件必然的
内発的		
外発的動機づけ 鹿毛(1994;1995)	内発的動機づけ	外発的動機づけ
学習動機		
樋口(1985)	課題志向 ⁽¹⁾	能力志向
		成人承認志向 ⁽²⁾
		友人承認志向
遠水(1987)	理解志向動機 ⁽³⁾	現実志向動機 ⁽³⁾
		承認志向動機 ⁽⁴⁾
桜井(1989)	内的動機 ⁽⁵⁾	外生的動機 ⁽⁶⁾
市川(1995)	充実志向	自尊志向
		報酬志向
	実用志向	関係志向
	訓練志向 ⁽⁷⁾	

(1) 樋口(1985)の課題志向、遠水(1987)の理解志向動機には、「自分の力を試してみたい」「立派な人になりたい」など向上志向の要素が含まれている。

(2) 樋口(1985)の成人承認志向には、「テストがあるから」「複雑があるから」といった条件必然性の要素が含まれている。

(3) 遠水(1987)の現実志向動機には、「友達に負けたくない」という相互比較志向の要素や「父や母を喜ばせたい」という関係必然性の要素が含まれている。

(4) 遠水(1987)の承認志向動機には1項目(「学校で得點ができるから」)のみ条件必然性の要素が含まれている。

(5) 桜井(1989)の内的動機には1項目(「おとなになって役に立つから」)のみ条件必然性の要素が含まれている。

(6) 桜井(1989)の外生的動機には1項目(「立派な人になりたいから」)のみ向上志向の要素が含まれている。

(7) 市川(1995)の訓練志向は、充実志向、実用志向に比べ内容必然性が低い。一般的能力の獲得に向けての向上志向の要素が含まれる。

2. 研究Ⅰ：努力動機の収集⁴⁾

(1)目的

まず研究Ⅰでは、自由記述によって努力動機を収集することを目的とする。特に、これまでの原因次元の概念では捉えきれなかった形の努力の種類(例えば目的のない努力等、社会学的立場から指摘されていた性質を持つ努力)が存在するのかどうかに注目したい。

なお、このような研究を行う際には、「何を頑張っていたか」という達成領域の違いを考慮すべきである(平川(上野)・尾崎,2000)が、広く様々な種類の努力動機を収集することが目的であること、1つの達成行動には複数の動機が絡んでいると考えられることから、ここでは1つの努力対象に複数の努力動機を想定し、対象による努力動機の違いの検討は避ける。

また、研究Ⅰ,Ⅱに限らず、本論文における調査対象は全て大学生に絞る。それは、例えば中学生や高校生であれば月々のテストや受験勉強に追われているであろうから、努力の対象や動機に大学生ほどの幅

が見られないのでは、と推測されることと、大学生と中高生とは能力観・努力観に差が見られ(越,1991)、特に能力と努力が相補関係にある、つまり同じ結果ならば努力が少ない方が能力が高い、という逆補償シエマには発達差がある(速水・松田,1982)ため、中高生よりも大学生のほうが様々な努力観に基づいた帰属様式をとれるであろうと考えたからである。

(2)方法

被調査者 大阪府下の大学に所属する大学生223名(男性95名/女性128名:平均年齢20.24歳)。大学の講義中に配布、また一部は手渡しの形で回答を求めた。

調査内容⁵⁾ 自由記述法による質問紙調査。

「あなたが現在頑張っていること、打ち込んでいることは何ですか。4つあげて下さい(4つ全部あげなくても結構です)。また、どうしてそれを頑張っているのか、その理由を5つの範囲で思いつく限り全てあげて下さい(5つ全部あげなくても結構ですが、2つ以上あげて下さい)」と、現在の努力の対象とその動機について自由記述させた。過去の努力動機についても同様の方法で回答を求めた。

(3)結果及び考察

努力の対象の分類 777(1人あたり3.48)個の努力の対象と、1969(1人あたり8.83)個の努力動機の記述が得られた。努力の対象1つあたり2.53個の努力動機が表出されたことになる。なお、努力していたこと、していること共に「ひとつもない」と答えた人、あるいは解答なしの人は、223名中5名しかいなかった(全体の2.24%)。よって、ほとんどの者が何かを「努力した」経験を持っていることがわかる。

どのような努力の対象が得られたか分類した結果がTable2である。分類は教育心理学を専攻する大学院生2名と教官1名が行い、最終的な一致率は97.9%であった。対象としては勉強が最も多かったが、受験勉強の末大学に入学し、今も本業としてレポートや研究をこなさなければならない大学生にとっては当然のことかもしれない。第2位はスポーツである。第3位のクラブ・サークル・部活動にはおそらくスポーツ関係のものが多く含まれるであろうから、それも考慮すると、スポーツも努力の対象としてはかなり一般的なものであると言えよう。

Table2:努力の対象

	度数 (%)		度数 (%)
勉強	242 (31.1)	ダイエット・お洒落	10 (1.3)
スポーツ	112 (14.4)	学外の社会的活動(ボランティア等)	8 (1.0)
クラブ・サークル・部活動(内容は不明)	82 (10.6)	旅行	8 (1.0)
アルバイト	81 (10.4)	絵画・イラスト	7 (0.9)
音楽	62 (8.0)	就職活動	5 (0.6)
恋愛	21 (2.7)	自動車免許取得	5 (0.6)
読書	16 (2.1)	遊ぶこと	5 (0.6)
学校の行事や係	15 (1.9)	書道	5 (0.6)
人間関係	14 (1.8)	その他	75 (10.2)

努力動機の分類 努力動機は50項目に分類された(Table3)。教育心理学を専攻する院生1名と学部生2名で分類し、最終的に91.5%と高い一致率を得たため、分類の妥当性は保証されている。「楽しいから、面白いから」という動機がぬきんで多く、「目標のための手段」「好きだから」「周囲がやっている、頑張っているから」「お金のため」と続く。内発的(intrinsic)、外発的(extrinsic)、親和的(affiliative)、勢力的(power)と様々な分類され得る動機が混在していることがわかる。

対象は勉強が最も多く、動機は「楽しいから、面白いから」が最も多いという結果は、「勉強=楽しいか

らやる」といった結果を想像させるものであるが、対象と動機の量は必ずしも対応していないので、そうとは言い切れない。また、「お金のため」がアルバイトの努力動機であることは明白である。このように、努力の対象と動機の関係に注目することも有用だろうが、最初に述べたように、対象にこだわらず努力動機を収集することに今回の意義があり、また1つの対象につき複数の動機が存在し処理が繁雑になるため、これ以上対象については扱わないこととする。さらに付け加えると、この結果は大学生が現在と過去の対象・動機を想起したもので、「勉強」が大学における勉強を意味しているのか、過去の受験勉強等を指しているのかは不明であり、大学に入る以前の中高校生等とは勉強の意味や動機が異なっているであろう。この点に関してはさらなる調査と検討が必要である。

Table3:努力動機 50 項目とその度数(計 1969 個)

01. 楽しいから、面白いから	254	27. 自分の内面的成长のため	21
02. 目標のための手段(ex. 合格したいから勉強する)	156	28. 後悔したくないから	20
03. 好きだから	141	29. 興味があるから	17
04. 周囲がやっている、頑張っているから	127	30. 得意だから、能があるから	16
05. お金のため	122	31. その他の「肯定的自己概念の獲得のため」という記述 (ex. 何か得意なものを作りたかった、自信が持てたから)	16
06. 将来のため	93	32. 新しい場所、人、世界に会えるから	15
07. 周囲の人が厳しいから、恐いから	84	33. 強くなりたい、うまくなりたい、勝ちたいから	15
08. 勉強になる、役に立つから	79	34. 頑張ること、一生懸命やること自体に意味があるから	15
09. 体のため、健康のため	56	35. その他の「状況が要求するから」という記述 (ex. 大会があるから、日常のことだから)	15
10. 他に打ち込めることがないから、暇だから	49	36. 認められたい、評価されたいから	14
11. 失敗した時の具体的な例の記述 (ex. 単位を落とすと留年するから)	47	37. 下手だから、苦手だから	14
12. やりがい、達成感、充実感があるから	42	38. 自分の社会的属性の記述(ex. 学生だから)	13
13. 仕方がないから	42	39. 憧れ、夢だから、かっこいいから	12
14. その他の「やりたいからやる」という記述(ex. 夢中になれる)	39	40. 期待されているから	11
15. 対象の属性の記述(ex. クラブだから)	37	41. 自己表現できるから	9
16. 知識を増やしたいから、知的好奇心から	34	42. 今しかできないから	7
17. 成功する、あるいは出来ると嬉しい、気持ちいいから	33	43. 現実逃避できるから	5
18. 人に悪い印象を持たれたくない、非難されたくないから	31	44. 責任があるから、責められているから	5
19. 結果を後に残したい、伝えたいから	30	45. その他努力志向の記述(ex. どうせやるなら一生懸命やりたい、 頑張って目的に打ち込んでること自体が楽しいから)	5
20. ストレス解消、気分転換になるから	28	46. 何となく、理由はない	5
21. やらなければ仕方がないから、義務感から	28	47. はまったから	4
22. 中でやめたくないから	27	48. 下手になりたくない、負けなたくないから	4
23. やりたいから	26	49. 自分で自分を認めたいから、試したいから	4
24. 親のため、他人のため	24	50. その他どこにも属さない記述、意味不明の記述	33
25. 友人、好きな人がいるから、仲良くなきたいから	23		
26. 成功したい、失敗したくないから	23		

3. 研究Ⅱ：努力動機の類型化

(1)目的

研究Ⅱでは、研究Ⅰの自由記述による結果に基づいて努力動機をカテゴリー化し、どのような努力動機が近接しているのか（どの動機が普遍的と言えるのか、あるいは他の動機とは関係の薄い独立した動機と言えるのか）について探索的に調査する。また、Rotter(1966)の概念によるlocus of controlとの関係も検討する。この概念では、結果が完全に自分の行動に随伴しているわけではないと知覚し、そして原因を自分ではなく運や環境に帰属させ、自分では統制できないと感じる信念は外的統制(external control)と呼ばれる。また反対に、自分自身の行動に結果が随伴し、原因を自分の能力や努力に帰属し、結果が自分の統制下にあると感じるのは内的統制(internal control)である⁶⁾。このlocus of controlを考慮することによって、結果の随伴性への信念と努力動機の関係を検証できよう。つまり、努力動機の種類によって、努力しても結果が出るとは限らないと思っている者を分類できるかを試みる。

(2)方法

被調査者 大阪府下及び鹿児島県下の大学に所属する大学生348名(男性181名/女性167名:平均年齢19.10歳)。大学の講義中に配布する形で回答を求めた。

調査内容 評定法による質問紙調査。

(a)努力動機尺度

研究Iで見い出された努力動機50項目のうち、尺度化可能であった45項目を選出し、答えやすいよう言葉使いなどを必要に応じて改めたものである。「あなたが昔頑張っていたこと・打ち込んでいたこと、あるいは現在頑張っていること・打ち込んでいること(勉強・部活・サークル・趣味・バイトなど)を、どんなことでも結構ですので、出来るだけたくさん思い出してください」と、過去と現在の努力の対象を想起させた上で、どうしてそれを努力していたのか「全くあてはまる」～「全くあてはまらない」の4件法で回答を求めた。

(b)locus of control(LOC)尺度

LOC尺度は、Rotter(1966)の開発した尺度の問題点を克服すべく、鎌原・樋口・清水(1982)によって新たに開発された尺度を使用した。「そう思う」～「そう思わない」の4件法で、全18項目、点数が高いほどInternal、低いほどExternalである。

(3)結果及び考察

LOC尺度項目分析 LOC尺度の弁別性を検討するため、LOC尺度合計得点の上位25%を上位群(75名)・下位25%を下位群(80名)としてG-P分析を行ったところ、全ての項目に有意差が見られた($p<.001$)。また、信頼性についてCronbachの α 係数を算出したところ、 $\alpha=.79$ と十分な値を示した。

努力動機尺度の処理 努力動機45項目を、先述した学習動機の研究(市川,1995;鹿毛,1995)を参考にKJ法によって分類したところ、8カテゴリーが見い出され、それぞれ①内容志向(内容自体が面白いから)、②実用志向(役に立つ手段から)、③関係志向(周囲の人との関係上)、④状況必然的動機(状況的にやらざるを得ない)、⑤自尊志向(自分の自尊心を高めるため)、⑥努力志向(努力自体に価値があるから)、⑦報酬志向(お金のため)、⑧理由なし(何となく)と命名された(Table4)。カテゴリーごとの α 係数を算出したところ、全てにおいて.70以上であった。

特に努力志向というカテゴリーが見られたことに注目したい。志向間のPearsonの相関係数を算出したところ(Table5)、この志向は内容・実用・関係・自尊の各志向と中程度の相関があり、ある程度自発的努力は努力自体を重んじる価値観に支えられている事を示唆している。この自己目的的な努力は、土居(1971)の言う、「そうしないと気がすまない」という目標がない努力に相等し、社会学的立場から指摘されてきた独特の努力の形態が実際に存在することが明らかとなった。

Table4:努力動機カテゴリーと努力動機45項目

内容志向(内容 자체가面白いから) $\alpha=.83$	平均(SD)	状況必然の志向(状況的にやらざるを得ない) $\alpha=.80$	平均(SD)
知識を増やしたいから、知的好奇心から	2.95(.91)	やらないと仕方がないから	2.04(1.00)
興味があるから	3.49(.71)	失敗すると困ったことになるから	1.86(.93)
はまったくから	3.17(.89)	やらなければならぬから、義務感から	2.05(.94)
好きだから	3.45(.74)		
憧れ、夢だから、格好いいから	2.67(.97)		
成功したり、うまくなったりすると嬉しいから	3.37(.79)		
やりたいから	3.41(.74)		
楽しいから、面白いから	3.37(.79)		
やりがいや達成感・充実感があるから	3.26(.86)		
実用志向(役に立つ手段として) $\alpha=.72$			
結果を後に残したり、伝えたりしたいから	2.74(.98)		
目標があるから、その手段として	3.07(.93)		
自分の内面的成长のため	2.92(.95)		
ストレス解消や、気分転換になるから	2.82(.94)		
将来のため	2.56(1.06)		
身体のため、健康のため	2.35(.98)		
現実逃避できるから	1.72(.83)		
勉強になったり、役に立つたりするから	3.00(.88)		
新しい人や世界に会えるから	2.93(.94)		
自己表現できるから	2.59(1.00)		
関係志向(周囲の人との関係上) $\alpha=.71$			
周囲の人もやっていたり、頑張っていたりするから	2.57(.94)		
人に悪い印象を持たれたり、非難されたりしたくないから	1.74(.77)		
人に期待されているから	2.15(.91)		
責任があったり、人に頼られたりしているから	2.21(.92)		
友人や好きな人と仲良くしたいから	2.87(.95)		
親や他人のため	1.67(.76)		
周囲の人が厳しかったり、怖かったりするから	1.52(.70)		

Table5:努力動機カテゴリー間の相関

	状況必然の動機					
実用志向	関係志向		自尊志向	努力志向	報酬志向	理由なし
内容志向	.56***	.09	-.36 ***	.52 ***	.48 ***	-.08
実用志向		.47 ***	.04	.62 ***	.62 ***	.18 ***
関係志向			.46 ***	.54 ***	.49 ***	.22 ***
状況必然の動機				.16 *	.06	.20 ***
自尊志向					.58 ***	.01
努力志向						.05
報酬志向						-.01

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

クラスター分析 これら8つの努力動機カテゴリーが実際にどのような形で見られるのか検討するため、カテゴリー得点による被調査者の分類を試みた。各カテゴリーの標準得点を求め、クラスター分析(Ward法)を行って被調査者を分類したところ、Figure1に見られるように、5つのクラスターが得られた(以降CL1~5と表記)。

各クラスターの特徴を知るために、努力動機カテゴリー標準得点の平均値を一元配置分散分析・多重比較(LSD法)で比較した(Figure2;Table6)。結果、CL1は、何となく周囲の人との関係や状況的にやらざるを得ないから努力するという「外発的努力群」、CL2は努力動機自体が全体的に希薄で、おそらく努力自体を行っていないと推察される「非努力群」、CL3はお金のためという動機のみが突出している「金銭的努力群」、CL4は内容志向が最も高い「内発的努力群」、CL5は様々な種類の努力動機を強く持っている「全般的努力群」と命名された。

以上の分析によって、一口に努力といっても様々なタイプがあり、外的な理由で努力せざるを得ないからしている者や、自分でも理由もわからず努力している者(おそらく努力自体をあまりしていないと想定される)なども少なからずいることが明らかになった。このような努力の存在は従来の達成動機理論では想定されていなかったものである。

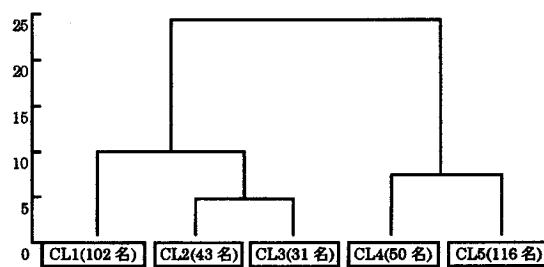


Figure1:クラスター分析の дендрограм

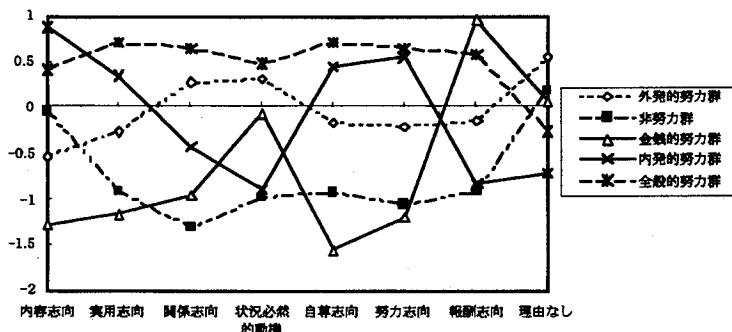


Figure2:クラスターごとの努力動機カテゴリー標準得点

Table6:努力動機カテゴリー標準得点のクラスター間比較

	CL1 (N=102)	CL2 (N=43)	CL3 (N=31)	CL4 (N=50)	CL5 (N=116)	F 値 (d.f.=4,337)	多重比較結果 (LSD)
内容志向	-.52 (.83)	-.04 (.61)	-1.27 (1.34)	.88 (.45)	.42 (.70)	52.02***	CL3<CL1<CL2<CL5<CL4
実用志向	-.26 (.52)	-.90 (.90)	-1.16 (1.05)	.35 (.97)	.71 (.71)	62.64***	CL3,CL2<CL1<CL4<CL5
関係志向	.28 (.61)	-1.30 (.68)	-.96 (.87)	-.43 (.55)	.66 (.84)	80.48***	CL2,CL3<CL4<CL1<CL5
状況必然的動機	.32 (.81)	-.98 (.39)	-.06 (1.05)	-.89 (.52)	.48 (.96)	44.35***	CL2,CL4<CL3<CL1,CL5
自尊志向	-.16 (.67)	-.92 (.86)	-1.55 (.77)	.46 (.61)	.72 (.63)	97.25***	CL3<CL2<CL1<CL4<CL5
努力志向	-.21 (.63)	-1.06 (.78)	-1.19 (.92)	.58 (.65)	.65 (.80)	73.56***	CL3,CL2<CL1<CL4,CL5
報酬志向	-.15 (.74)	-.90 (.27)	.96 (1.04)	-.83 (.39)	.58 (.95)	57.79***	CL2,CL4<CL1<CL5<CL3
理由なし	.56 (.93)	.18 (1.30)	.08 (1.12)	-.71 (.52)	-.26 (.77)	20.18***	CL4< CL2 <CL1 CL3,CL5

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

カッコ内は標準偏差

群間のLOS尺度の比較 クラスター分析で得られた5群間のLOC得点について、一元配置分散分析を行った。多重比較(LSD法)の結果、LOC得点は「内発的努力群」「全般的努力群」が他より有意に高かった(Table7)。よって、あまり努力しない者や、努力していてもその理由が曖昧か外的な者は、結果の統制の自信がないことがわかった。

Table7:LOC得点のクラスター間比較

	CL1 (N=102)	CL2 (N=43)	CL3 (N=31)	CL4 (N=50)	CL5 (N=116)	F値 (d.f.=4,337)	多重比較結果 (LSD)
LOC	47.25 (6.16)	47.40 (9.10)	46.71 (9.04)	51.34 (8.25)	50.51 (6.92)	5.07***	CL3, CL1, CL2 < CL5, CL4

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

カッコ内は標準偏差

5. まとめと今後の課題

本研究では、努力動機を収集し、それを類型化して、どのような努力動機が存在するのかについての探索的研究を行った。結果、社会学や教育学で指摘されていたように、努力には様々な形態のものがあり、これまでの達成動機研究では扱われていなかった、外発的、自己目的的、といった努力も実際に存在することが明らかとなった。また、努力動機とLOCとの関係を検討したところ、これまでの論で無視されてきた努力の形態を持つ者には、努力しても結果を統制することができないと思う傾向があることが示された。

これらの結果は、被調査者が、Weiner理論に含まれない、あるいはそれに反する様々な意味で努力を捉えていることを示している。努力の経験が様々であり、またそれによって努力と結果との対応関係が異なって受け止められているとなると、結果を努力に帰属したときの影響が一様でないことになる。またそれ故に帰属様式も異なってくる可能性が高い。従来のいくつかの研究において努力帰属の機能が理論と一致しなかった理由は、このように努力の捉え方自体が様々であったからと考えられ、達成動機研究を行う際に被調査者の努力観を考慮する必要性が示された。

いくつかの課題も残された。まず、今回は努力の対象については扱わなかったが、例えば金銭的努力群の努力対象はアルバイトであることが想定されるように、努力の動機について類型化したつもりでも、結局は対象について類型化しているおそれがある¹⁾。さらなる研究が必要である。また、質問紙の構成上、努力の質については扱えたが、量については扱うことができなかつたため、CL2は、努力自体を行っていないのだろうと仮定して非努力群と命名したが、あくまで仮定にすぎない。何よりも、これらの努力動機が原因帰属過程及び達成動機にどのような影響を与えていたか、今後検討していくことが必要だろう。

さらにつけ加えるならば、今回は努力に焦点を絞ったが、達成動機づけ理論に基づいた研究を行っていく上では、努力と同じく一般的な帰属因とされている能力にも注目する必要がある。日本において努力が特殊な地位を占めているのと同じように、日本では知的な人(intelligent person)の特徴として、課題解決能力よりも、努力を通して獲得できる社会的能力の高さを挙げる傾向がある(Azuma & Kashiwagi, 1987)ことなどから、能力観にも文化差があるという指摘もなされているのである(伊藤, 1995)。よって、様々な研究領域における能力観をめぐる議論なども概観し、能力観そのものに焦点をあてた研究、また本研究で得られた努力観との関係をみる研究等が必要とされるであろう。

〈注〉

- 1) 後に帰属因・帰属次元ともに改正され、「普段の努力(typical effort)」は「内的」「安定」「統制可能」、「直前の努力(immediate effort)」は「内的」「不安定」「統制可能」と分類された(Weiner, 1979)。
- 2) 鹿毛(1995)は、その他、達成動機・目標理論・目標志向性研究における様々な概念もこの枠組みの中に位置づけているが、割愛する。
- 3) 注意すべきなのは、この3つの必然性は相互に独立したものではないということである(鹿毛, 1995)。つまり、学習や達成行動は1つの学習意欲によって生じるのではなく、複数のものが絡みあっていることが一般的である。
- 4) 研究Ⅰ及び研究Ⅱの結果の一部は、日本教育心理学会(平川(上野), 1999)において発表された。
- 5) 実際の質問紙にはここで述べる以外の尺度項目も含まれていたが、分析結果を用いない場合には記載しない。
- 6) 注意すべきなのは、これは連続的な変数であって、内的統制型—外的統制型という類型ではないこと

と、人格変数というだけではなく状況変数でもある、という点である(鎌原,1995)。鎌原(1995)によれば、内的一外的統制を測定する尺度の検討では、一般的な尺度よりも学業などに絞った領域特殊な尺度の方が、実際の達成との相関が高いという。状況要因を加味する必要性は高い。

- 7) LOCも状況変数として扱われることを考慮すると、やはり領域(状況)要因を加味する必要は高いだろう。

<引用文献>

- Azuma,H., & Kashiwagi,K. 1987 "Descriptors for an intelligent person: A Japanese study." *Japanese Psychological Research*,29,17-26
- 相川充・三島勝正・松本卓三 1985 「原因帰属が学業試験の成績に及ぼす影響～Weinerの達成動機づけに関する原因帰属モデルの検討」 『教育心理学研究』,33,195-204
- 天沼香 1987 『「頑張り」の構造』 吉川弘文館
- Covington,M.V., & Omelich,C.L. 1979 "Effort: The double-edged sword in school achievement." *Journal of Educational Psychology*,71,169-182
- 土居健郎 1971 『甘えの構造』(第3版) 弘文堂
- 速水敏彦 1981 「学業成績の原因帰属」 『教育心理学研究』,29,80-83
- 速水敏彦 1987 「学習動機に関する一研究」 『名古屋大学教育学部紀要(教育心理学)』,34,15-23
- 速水敏彦・長谷川孝 1979 「学業成績の因果帰着」 『教育心理学研究』,27,197-205
- 速水敏彦・松田敦子 1982 「原因シェマの発達～学業成績の能力および努力帰属に関して」 『教育心理学研究』,30,165-174
- 樋口一辰 1985 「児童の学習動機と学業達成場面での原因帰属様式」 『学習院大学文学部研究年報』,32,253-272
- 樋口一辰・鎌原雅彦・大塚雄作 1983 「児童の学業達成に関する原因帰属モデルの検討」 『教育心理学研究』,31,18-27
- 平川(上野)淳子 1999 「大学生の努力動機とその類型化の試み」 『日本教育心理学会第41回総会発表論文集』,695
- 平川(上野)淳子・尾崎仁美 2000 「達成動機研究における方法論の検討と課題」 『大阪大学教育学年報』,5,85-98
- 広瀬幸雄・石井徹・木村昌幸・北田隆 1982 「達成動機と原因帰属がパフォーマンスに及ぼす効果～Weinerのモデルの実験的検討」 『実験社会心理学研究』,22,27-36
- 穂坂智俊 1989 「算数場面における自信、好意度と原因帰属の影響過程についての一研究」 『教育心理学研究』,37,259-263
- 市川伸一 1995 『学習と教育の心理学』 岩波書店
- 伊藤忠弘 1995 「自尊心の維持と高揚」 宮本美沙子・奈須正裕(編) 『達成動機の理論と展開』 金子書房 161-186
- 伊藤崇達 1996 「学業達成場面における自己効力感、原因帰属、学習方略の関係」 『教育心理学研究』,44,340-349
- 鹿毛雅治 1995 「内発的動機づけと学習意欲の発達」 『心理学評論』,38,146-170
- 鎌原雅彦 1995 「随伴性認知」 宮本美沙子・奈須正裕(編) 『達成動機の理論と展開』 金子書房 89-114
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 「Locus of Control尺度の作成と、信頼性・妥当性の検討」 『教育心理学研究』,30,38-43
- 刈谷剛彦 1995 『大衆教育社会のゆくえ～学歴主義と平等神話の戦後史』 中央公論社
- 河合隼雄 1976 『母性社会日本の病理』 中公叢書
- 北山忍・高木浩人・松本寿弥 1995 「成功と失敗の帰因: 日本的自己の文化心理学」 『心理学評論』,38,247-280
- 越良子 1991 「大学生の能力・努力観に関する研究」 『広島大学教育学部紀要』,40,103-107
- Marsh,W.H. 1984 "Relations among dimensions of self-attribution, dimensions of self-concept, and academic achievements." *Journal of Educational Psychology*,76,1291-1308

- 中根千江 1967 『タテ社会の人間関係 単一社会の理論』 講談社現代新書
- 中谷彪 1991 「“ガンバレ”論の教育学的考察~アメリカと日本の教育文化比較」 『教育学論集』,20,111-119
- 奈須正裕 1990 「学業達成場面における原因帰属、感情、学習行動の関係」 『教育心理学研究』,38,17-25
- 奈須正裕・堀野緑 1991 「原因帰属と達成関連感情」 『教育心理学研究』,39,332-340
- Ronis,D.I., Hansen,R.D., & O'Leary,V.E. 1983 "Understanding the meaning of achievement attributions: A test of derived locus and stability scores." *Journal of Personality and Social Psychology*,44,702-711
- Rotter,J.B. 1966 "Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement." *Psychological Monographs*,80,1-28
- Russell,D. 1982 "The casual dimension scale:A measure of how individuals perceive causes." *Journal of Personality and Social Psychology*,42,1137-1145
- 桜井茂男 1989a 「児童の絶望感と原因帰属との関係」 『心理学研究』,60,304-311
- 桜井茂男 1989b 「小学生における学習動機の測定」 『奈良教育大学紀要(人文・社会)』,38,207-213
- Weiner,B. 1979 "A theory of motivation for some classroom experiences." *Journal of Educational Psychology*,71,3-25
- Weiner,B. 1983 "Some methodological pitfalls in attributional research." *Journal of Educational Psychology*,75,530-543
- Weiner,B.,Frieze,I.,Kukla,A.,Reed,L.,Rest,S., & Rosenbaum,R.M. 1971 "Perceiving the causes of success and failure." Jones,E.E.,Kanouse,D.E.,Kelley,H.H.,Nisbett,R.E.,Valins,S., & Weiner,B.(Eds.) *Attribution:Perceiving the causes of behavior*. New Jersey:General Learning Press. 95-120

What is "Effort"? : From the Viewpoint of Effort Motive

UENO, Junko

Although Weiner has proposed as an attribution theory of achievement motivation that effort attribution is related to the expectancy of subsequent success and promotes performance, some empirical studies do not support this theory. One of the reasons for this disagreement could be that the concept "effort" may have more meanings than what Weiner has supposed in his theory. In fact, many Japanese sociologists and pedagogists have pointed out that the conception of effort is different in Japan. However, there has been no psychological research to verify this different concept of effort. Therefore, in the present study, the meanings of effort was examined from the viewpoint of effort motives.

The effort motives of university students were investigated by asking what the reasons are to make an effort in a questionnaire. In survey I, many effort motives were collected using an open-ended questionnaire. In survey II, effort motives were classified and its functions were investigated. As a result, many types of effort motives that were not covered in previous studies such as no reason to make an effort, extrinsic reason to make an effort, and an effort itself as a purpose of making an effort were extracted. Also, these types of reasons to make an effort were related to the belief that the outcome would be uncontrollable even if one makes an effort.

How the conceptions of effort, including effort motives, influences one's attributional styles must be examined in future research.